

# 金子 熊夫

かねこ・くまお＝外交評論家、エネルギー戦略研究会会長、E.E.E会議代表。初代外務省原子力課長。著書に「日本の核・アジアの核」など。ハーバード法科大学院卒。69歳。kaneko@hyper.ocn.ne.jp。http://www.eecom.jp



さる11月15日から10日間、インドの原子力事情を視察してきた。実は、筆者

のインド原子力視察は今回が3度目で、第一回は1983年秋。このときは、最初の核実験(74年)後最初にインドの原子力施設を訪問した日本政府の職員ということで大変緊張した記憶がある。ボンベイでは当時の原子力委員長で核実験を指揮したラジャ・ラマンナ博士とも酒を飲みながら大いに語り合った。

その次は95年夏、2回目の核実験(98年)の3年前で、嵐の前夜の如き緊迫した雰囲気を感じられた。これら2度の訪印の模様は、拙著「日本の核・アジアの核」(1997年、朝日新聞社刊)の第四

## 時評

2006.12.11

## ウェブ

章「ガンジス河畔で考えたこと」に詳述してある。

3回目の今回は、筆者が主宰するエネルギー戦略研究会の同志5名(東京電力・東工大、原子力開発機構の専門家を含む)からなる代表団の団長としての訪問であったが、在日インド大使館とインド外務省の強力な支援もあって、筆者の期待以上に多数のハイレベル

み、その2日後、中国の胡錦濤国家主席が初めてニューデリーを公式訪問、マンモハン・シン印首相との会談で中印原子力協力関係推進に合意。さらに、その翌日、パリで開催された国際熱核融合実験炉計画(ITER)初会合で、カ

の参加国として基本文書に署名したとのニュースも入ってきた。その結果、インドの原子力界だけでなく国内の各方面で原子力国際協力への期待が一気に盛り上がり、我々の訪問も期せずして絶好のタイミングとなり、各訪問先で非常に温かい歓迎を受けた。

に2度にわたって核実験を実施。そのため長年原子力供給国グループ(NSG)による厳しい制裁措置の対象となってきたが、その半面、核拡散防止面では、「核の闇市場」で悪名を高めた隣国パキスタンとは一線を画し、厳格な態度を維持している。そこへ9・11後の対テロ戦争の遂行上その他の考慮から、ブッシュ政権下の米国が

の対印政策を大きく転換、民生分野の原子力協力の道が開きつつあるというわけである。

インド側としても、過去三十余年西側先進国との交流を断たれ、自力で開発した独自の重水炉(PHWR)で頑張ってきたが、いかにせん、電気出力が小さく、現在稼働中の15基で僅か300万キロワット、平均して1基約20万キロワット。

そこで、急増する電力需要に対応して2020年までに2千万キロワットに拡大するという従来の計画を、経済成長重視のシン政権になって一気に4千万キロワットに倍増する計画を打ち出した。そのためには、どうしても先進国製の大型の軽水炉を導入する以外にない。しかもインドにはトリウムは豊富に賦存するもののウランは乏しいので、濃縮ウラン燃料をセットで輸入する必要がある。米印原子力協力はインドにとって、願ってもない話だ。12月初めには米国の大型経済ミッションが訪印。仏、露、英なども対印進出に意欲的だ。

こうした状況で行われた筆者らの訪印は、いうまでもなく純然たる民間ミッションであったが、12月半ばのシン首相の公式来日を控えて、インド側では大きな期待を持って迎え入れてくれたわけである。

# インドの原子力事情視察記

丁度インドに着いた翌々日、米国議会の上院(本会議)が懸案の米印原子力協力量案を圧倒的多数で可決したとのニュースが飛び込

で可決したとのニュースが飛び込

で可決したとのニュースが飛び込

で可決したとのニュースが飛び込